

【現役世代の死生観に関する調査】

死を受け入れるのは、「認識・判断できなくなった時」。医師による判断は半数を下回る。
自分の死を意識している人は、意欲的・自律的・前向きで、幸福度が高い。

高齢期のライフスタイルの充実について調査・研究・提言する、特定非営利活動法人「老いの工学研究所」(大阪府中央区、理事長：西澤一二、<http://oikohen.or.jp/>)は、現役世代の死生観と現在の生活姿勢などの関係について調査し、このたび結果がまとまりましたのでお知らせ致します。

1. 死を受け入れるのは、「認識・判断できなくなったとき」が87%でトップ。次いで、「周囲に迷惑をかけるようになったとき」が73%。「医師に治療できないと言われたとき」は、47%と半数を下回った。
2. 自分の死を意識することで、人生が充実し、幸福度も高まる。

●自分の死を意識している人の特徴（意識していない人との違い）

① 貢献や交流への意欲がある。

死を受け入れる時を、「生きがいがなくなった」「役に立てなくなった」「交流がなくなった」時だと考える人の割合が、自分の死を意識していない人よりも、15%以上多かった。

日頃の生活姿勢では、「他世代と交流している」「誰かの役に立とうとしている」が、自分の死を意識していない人よりも、10%以上多かった。

② 前向きで自律的。成長の実感を持っている。

死の受容や生活姿勢に関する質問に対して、肯定する(「そうだ」「ややそうだ」)傾向があり、全体に前向きで、意思が明確である。

また、「年齢なりに成長・成熟していると思う」と答えた人は76%で、自分の死を意識していない人を10%上回った。

③ 幸福度が高い

32%が、現在の幸福度(10点満点)を10点あるいは9点とした。自分の死を意識していない人は16%であり、幸福度の高い人の割合は約2倍となった。

今回のアンケートでは、自分の死をしっかり意識する人ほど、生活が充実し、幸福度も高まる傾向がありました。長寿化によって高齢期の充実が重要課題となっていますが、死をしっかり意識することが、一つの解決策となり得るのではないかと考えられます。また、死をしっかり意識すれば、死を恐れず、死について会話をし、死を受け入れる時を明確にできるといった傾向が出ており、これは高齢者を支える子供世代にとっても、大きな恩恵になるはずです。

現代は、核家族化の進行や地域社会の変化によって、昔のように死を身近に感じる機会がなくなってきていますが、これによるマイナス面を示唆する結果となりました。

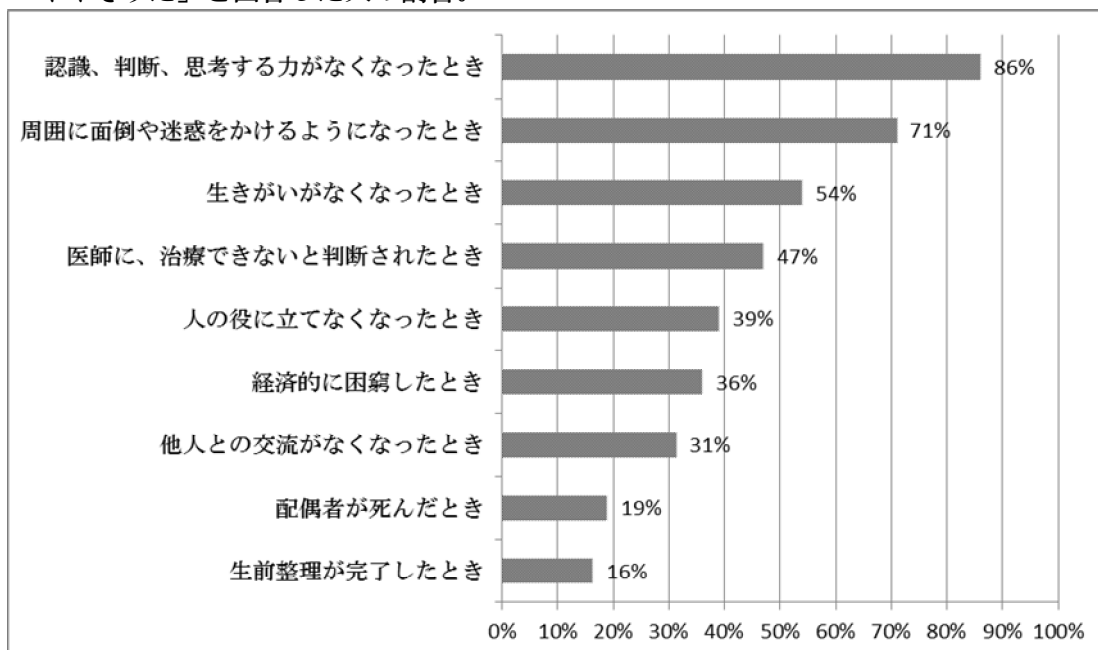
本調査では20～59歳まで201名に回答をいただきました。12月には、70歳代・80歳代が中心の当研究所のモニター会員約1万2千人を対象として、同じ内容のアンケートを実施します。高齢世代から回答を加えることにより、改めて分析を行い、発表する予定です。

＜お問い合わせ先＞

特定非営利活動法人「老いの工学研究所」
研究員 川口 雅裕
大阪府中央区伏見町四丁目2番14号
06-6223-0001
info@oikohen.or.jp

1. “死を受け入れる” とすれば、どのようなときか？

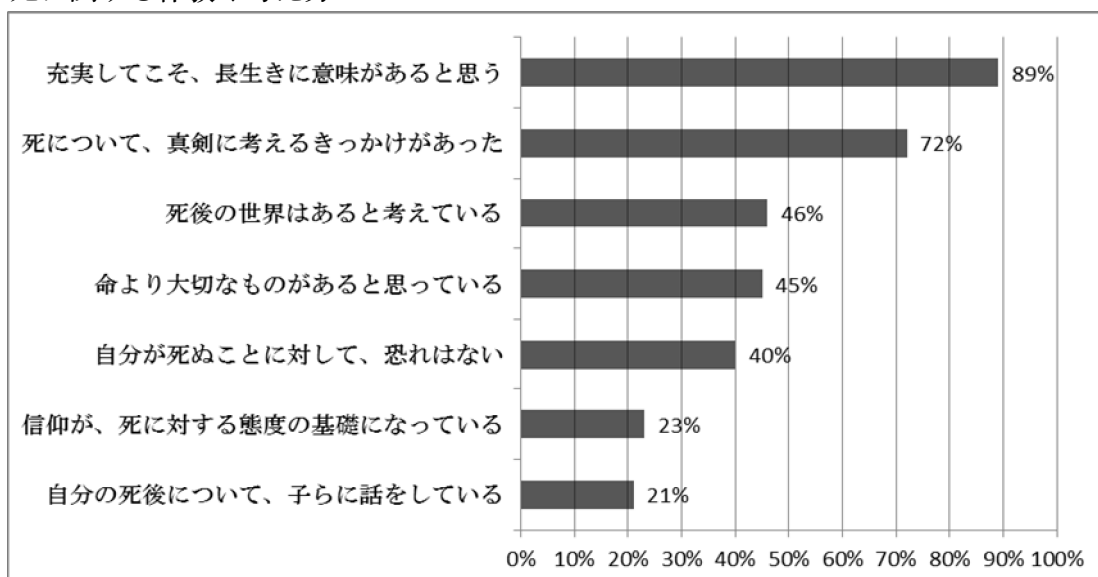
「死を受け入れるのは、どのようなときだと想像しますか？」という質問に対して、「そうだ」「ややそうだ」と回答した人の割合。



「認識・判断・思考する力がなくなったとき」「周囲に対して面倒・迷惑をかけるようになったとき」が、非常に高い割合となり、多くの人が 自立が失われたら、死を受容すると考えていることが明らかになりました。

「医師に治療できないと判断されたとき」は、47%にとどまり、医師に死に時の判断をゆだねる人は、半数に満たないという結果となりました。

2. 死に関する体験や考え方



「死について真剣に考えるきっかけがあった」人の割合は72%と高くなりましたが、「信仰が、死に対する態度の基礎になっている」人は23%と少なく、死を考えるきっかけは信仰よりも、身近な人の死や災害・事故・事件等の報道によるものではないかと考えられます。

本アンケートでは、「自分の死を、しっかり意識していますか？」という質問を行いました。次に、自分の死を意識している人（「そうだ」「ややそうだ」と回答した人）と、自分の死を意識していない人（「そうでない」「ややそうでない」と回答した人）の違いを見ていきます。

3. 死への意識と“死を受け入れる時”との関係

自分の死を受け入れる時について、「自分の死を意識している人」と「意識していない人」とで比較したところ、以下のようになりました。

	自分の死を意識している	自分の死を意識していない	差
人の役に立てなくなったとき	47%	28%	18%
生きがいなくなったとき	64%	47%	17%
他人との交流がなくなったとき	37%	22%	15%
配偶者が死んだとき	22%	16%	6%
認識、判断、思考する力がなくなったとき	88%	84%	4%
医師に、治療できないと判断されたとき	51%	48%	3%
周囲に面倒や迷惑をかけるようになったとき	73%	72%	1%
経済的に困窮したとき	37%	39%	-2%

「人の役に立てなくなったとき」「生きがいなくなったとき」「他人との交流がなくなったとき」の3項目で、15ポイントを超える大きな乖離がありました。これらから、死を意識している人は、そうでない人に比べて、社会との関わりや生活の充実を重視している傾向にあることが分かります。

また、8項目中 7項目で、死を意識している人の割合が上回っており、死を意識することで、自らの死に時を考え、死に対する意思が明確になっていることが分かります。

4. 死への意識と、生活姿勢・生活実感との関係

日ごろの生活姿勢や実感における違いは、以下の通りとなりました。

	自分の死を意識している	自分の死を意識していない	差
他の世代と、積極的に交流している	80%	59%	21%
年齢なりに成長、成熟していると思う	74%	63%	11%
誰かの役に立とうとしている	90%	80%	10%
感謝の気持ちを持って生きている	96%	88%	8%
周囲からの期待や敬意を感じる	76%	70%	6%
やりたいことをやっている	84%	79%	5%
自然体で、自分らしく生きている	85%	82%	4%
夢や目標がある	86%	83%	3%
楽しく、充実している	86%	88%	-2%
振る舞いや言動に気を付けている	89%	93%	-4%

「他の世代と、積極的に交流している」「年齢なりに成長、成熟していると思う」「誰かの役に立とうとしている」などで乖離が大きく、死を意識している人が、そうでない人に比べて、積極的かつ調和的に周囲と関わっており、成長実感も高いことが分かります。

また、10項目のうち8項目で「死を意識している人」の割合が高く、全体に、自律的で前向きな生活姿勢が感じられる結果となりました。

5. 死への意識と、幸福感との関係

現在の幸福度を自己採点して頂いたところ、平均は7.45点となり、次のように分布しました。

幸福度	10点	9点	8点	7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点
割合	12.4%	13.0%	28.5%	26.4%	7.3%	6.2%	1.6%	2.6%	1.0%	0.5%	0.5%

平均が7.45点であったため、8点と7点を平均的な幸福度とし、それよりも上の10点と9点をつけた人の割合について、死を意識している人と意識していない人を比較したところ、前者は31.6%、後者は15.8%と約2倍の開きがありました。死への意識と幸福度の高さが関係しているのではないかと考えられます。

	自分の死を意識している	自分の死を意識していない
10点、9点をつけた人の割合	31.6%	15.8%

6. 死への意識と、死に関する体験や考え方との関係

	自分の死を意識している	自分の死を意識していない	差
死について、真剣に考えるきっかけがあった	91%	42%	49%
自分が死ぬことに対して、恐れはない	54%	17%	37%
自分の死後について、子らに話をしている	32%	5%	27%
死後の世界はあると考えている	51%	38%	13%
命より大切なものがあると思っている	50%	37%	13%
信仰が、死に対する態度の基礎になっている	24%	19%	5%
充実してこそ、長生きに意味があると思う	87%	90%	-3%

「死について真剣に考えるきっかけがあった」「自分が死ぬことに対して、恐れはない」「自分の死後について、子らに話をしている」の3項目について、顕著な差が見られます。

死に対する意識の有無は、過去に、死について真剣に考えるきっかけがあったかどうかにより大きく影響を受けている。そうして、死について考え、意識した結果として、死に対する恐れが消え、子らに対しても死を口にすることができるようになるのではないかと考えられます。

<調査概要>

- ・ 調査期間：2014年10月15日～11月5日 調査方法：インターネット
- ・ 回答者：20歳～59歳の男女201名（男性112名／女性89名）

20歳代	30歳代	40歳代	50歳代
8%	18%	40%	34%